
召喚師のヒエラルキー

根津地 陽山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚師のヒエラルキー

【Nコード】

N2777Y

【作者名】

根津地 陽山

【あらすじ】

陰陽師の和樹は父親から送られてくる魔道書をいつもどおり、自宅にしまっていた。そんな時、召喚についての魔道書といっしょにある宝具が送られてくる。そして、それと関係するように自分を宝具の最上級のヒエラルキー……神器となる少女が現れる。そして、和樹は召喚師同士の戦争に巻き込まれて行く

1-1 (前書き)

いつもより、スローペースでかけた。(いつも急展開なんで)
でもここにはほとんど投稿しないからいつもどんな感じの小説かは
みんな知らないけどね。

日曜日という学生にとっては、一週間の学校から開放された祝福の日であって、遅くまで寝てたいのに神木和樹は七時に起きてしまった。

それも、そうだろう。先程からずっとこの、ほぼ学生寮化したアパートの自分の部屋から玄関のインターホンの音が五分ぐらいなっているからだ。

そして、諦めたようにインターホンの音が消えると玄関の出口になにか、ドサツと何かものが置かれる音がする。

一番奥の部屋でベッドで寝てた夜行にも聞こえるのだから結構重いものなのかもしれない。

「まさか……」

とあせったように、ある可能性が和樹の頭のなかによぎる。

ベッドから出ると急いで玄関に向かい外にでる。

案の定、そこには和樹が予想していたダンボールと宅配便の薄っぺらい紙が貼ってある。

中身は見なくてもわかる。大量の本だ。それも、ただの本ではない。魔術書と呼ばれる、魔術について書いた本だ。普通、そんなものは漫画やアニメの世界だけだと大抵の人は思うだろう。だが、魔導書を見た人はそれを魔術書だと信じるだろう。

魔導書を見た人ならわかるが、魔導書からはまるで意志があるかのように何かを感じれる。

そして、実際にダンボールからは不気味な何かを発している。

「仕方ない」

和樹はため息まじりに呟くとダンボールを持ち上げアパートの階段を降りる。思った以上に重量があり、階段を下る足取りは慎重になる。

階段を降りると、近くにあった自分の自転車の後ろにダンボール

をのせ、落ちないように伸縮できるゴムバンドで頑丈にしぼる。
パジャマのままだったが、まだ朝でそんなに人がいるわけでもない
ので着替えもせずに和樹は自転車をこいでいく。

自転車をこいで十分。ある一軒家にたどり着く。そしてその家の
表札には神木とかかかっている。

ここは和樹の家だ。だが、家族は一人もすんでいるわけではなく、
ほぼ空家だ。

自転車からダンボールを持ち上げ玄関の入口まで運ぶ。
鍵を取り出し扉を開け、ダンボールを玄関の前に置く。

どすつと、重そうな音をたて、ダンボールを開けていくと分厚い
本が五冊入っていた。

それらをダンボールから取り出すとそれを持ち、ある部屋に進ん
でいく。

部屋の中は書斎で本棚には二千冊の本がぎっしりと詰められてい
る。それらはすべて、魔導書や魔術についてかかかれて資料だ。

和樹は空いた本棚に本を綺麗に収める。
玄関に戻りダンボールをくずそうとすると、なかに何か入ってい
る。

「なんだ、こりゃ」

ちようど握りこぶし三、四個ぐらいの長さで全て漆黒の色に包ま
れている。刀の柄にもみえなくはない。

そのときだった。家の電話のベル鳴った。

普段和樹の家はだれも居ないので、ここに電話をかけてくる相手
は一人しかいない。

電話をとりリビングに出る。

「なんだよ、親父」

「お、なんでわかったんだ」

「ここはいつもあけてるからな。電話がかかってくるなら、身内。」

さらに魔術書の資料やらが送られてきたこのタイミングで電話がかつてくるってことはあんただろ」

「よくわかったな」

和樹のアパートの前に魔導書やらを送ってくるのは和樹の父親だった。

「ところで質問なんだけど、あの黒い棒はなに？ 何か刀の柄にも見えるけど」

「ああ、あれか。……あれは宝具だ」

「宝具？ なんで宝具なんか」

「必要になるんだよ」

急に和樹の父親の声の真剣味が変わる。

「黒漆ノタチが必要になる」

「はっ。どういうことだよ」

「今日送られてきた本に詳しいことは書いてある。全部読めよ」といって、和樹の父親は電話を強引に切ってしまった。

和樹は受話器を置き、書斎に戻る。

とりあえず、今日送られきた本を五冊を本棚から抜き取るとガラステ이블におきソファに座り、一冊だけ手に取る。だが、その本は和樹が知っている魔術書の不気味な感じがしない。多分魔術の核心部分ではなく魔術の仕方だけを書いた魔術関連の資料だろう。

何も表紙には書いてなく、仕方なく表紙をめくる。

書かれている文字は英語だった。かといって和樹には読めないわけではない。小さい時から英語の魔導書を読んだこともあるし、大きい休みの日などは家族と海外にいたりしていたのでそれなりに英語に自信がある。

そして、ページの真ん中にはどんな内容の本か英語で書かれていた。

その文字を見た瞬間、和樹は父親が言っていた。「必要になる」という意味がわかった気がする。

まだ、何もめくってないが、別の魔術関連の資料を読んで召喚がどういうものなのかを知っている。

魔方阵を書き、人間というヒエラルキーより上位な天使や神々を人間が感覚として取れるところに呼び出す。それが召喚だ。

そして、その召喚された天使や神を宿した人間が力もち暴走するを抑えるために宝具と呼ばれる伝説の武器がある。ロンギヌスの槍、アスカロン、ダーインスレイヴどれもが神話や伝説にでくするものが元である。

だが、その宝具を手にしてどうするのだと夜行は思う。

何かくい止めるとでも言うのだろうか。

「まさか、俺に召喚をさせる気か」

おもいついたことを呟く。

別の積み上げた本を取る。そしてそれを手にした瞬間、急な吐き気が和樹を襲う。

「うつ……うつ」

瞬時に手で口を覆い、耐える。やがて、それが手にした魔導書の影響だとわかると一旦、和樹は手を放す。

そして、ソファに座り落ち着いたところでもう一度、魔導書を手にする。

1-1 (後書き)

とりあえずバトルは後三話後ぐらいに

1 - 2 (前書き)

前回からすごい相手います。すみません。
いろいろあって入院しました。

また、さっきの激しい何かが、和樹を襲う。だが今回は耐えた。やがて、その何かになれ、魔術書のページを開く。

「これも、召喚について……か」

一人和樹はつぶやく。

内容は悪魔についての召喚についてだった。召喚の陣の書き方悪魔を呼びかける方法、そしてその悪魔が司る《つかさど》能力。

30ページぐらい読むと、これが魔術書ということからか、辛くなってくる。

魔術書は少し読むだけでもすごい疲労させられる。

だいぶ時間が立ち、パジャマ姿で帰るといろんな人にみられそうだった。

「早めに戻ったほうがいいかな」

和樹は、本をそのままにして家をでて、鍵をかけると自転車をこいでアパートに戻った。

日曜ということか、まだみんな外に出る人は少ないらしく、全然人に会わなかった。

和樹がアパートに戻ると茶髪のツンツンともボサボサとも見える髪形をした高校生が出てきた。同じアパートの住民、秋川名刀《あきかわめい》だ。

「よう」

まだ、朝なのに眠気を感じさせない軽快な声がとんできた。

肩には二メートルぐらいの弓が入った紺の絹でできた入れ物をかけていた。

名刀は弓道部だ。

「はえーな」

「ああ、まあもう慣れたけどな。お前もはえーな、またあれか」

「ああ。またあれだ」

名刀は和樹の部屋のまえに毎回荷物が置かれ、それを家にもっていつていることを知っている。それが魔術書。ということは知らないが。

「ま、がんばれよ部活」

すれ違いざまに言うところを振り向かず、手を降って返事をしてきた。

その背中を見終えるとまた和樹は歩きはじめ階段を上り、自分のアパートの部屋に戻っていく。

扉を開けるとカーテンを閉じたままのせいか部屋が薄暗い。

「あゝすることねえ」

和樹は名刀のように部活動に参加していない。そして、和樹の友達は夜までバカやって、警察にごようになるまでもないがこんな朝っぱらから起きていそうな奴もいなく、遊ぶ相手がいない。

「——暇だ」

とりあえず、この薄暗いままだと連鎖して心も薄暗く、黒くなっていきそうなのでカーテンを開けに行く。

カーテンを開けると眩しい日がさしてくる。

とりあえずカーペットに座り込む。が、和樹にはすることがない。

「くそ。なんだこの暇は」

久しぶりに朝早くからおきたせいか、とてもこの時間帯は暇だった。

とりあえず、朝飯をしようと和樹は考えると玄関をでる。

和樹のアパートにはキッチンなどはないので一階の大家さんの家をホームシアリングのように共同で使っている。

ドアを開けたら、玄関のそこから胡椒で肉を焼きたい匂いがした。
あや靴を脱ぎ、キッチンを覗くと隣の隣の部屋にいる、和月へわづ

き》綾一がキッチンでなにか作っているところだった。

「何、つくってんだ」

カウンターキッチンの前の椅子に座る。食パンの山が積み上げられてあって、何かを焼いているらしく綾の長い髪が少しゆれている。

「いまベーコンやいてるの」

カウンターキッチンの上から覗くと、さらにもう出来上がったスクランブルエッグ、なにもされていないレタスがあった。

「なんだ、この朝の定番ランチは……」

「別に、和樹の分はないんだしいいじゃん」

「いや、俺は朝食食べるためにきたんだよ。なんでつくってくれないの？ それともなに。俺に家庭的なスキルをおもてめですか」

「いえ、全然」

「なら俺の文もつくってくれないでしょうか」

一応、丁寧についてみる。

「だって、さっき文句があるみたいについてたし、私は他のもの作らないし」

なんだ、それか。と和樹は思う。

「先程はすみませんでした」

先ほどより更に丁寧にいつてみる。

「わかった。作ってあげる」

数分かってでてきたのは、ベーコンとスクランブルエッグとレタスを挟んだ。この家で当たり前の朝の定番ランチだ。

「そういえば、この後どうすんの」

自分のも作り終えた綾がとなりに座ってくる。

「あー……。いつも通り、モンハン、桃鉄、スマブラでもやりながら遊んでるよ」

「よく、それで堂々といきてるよね」

「まあ、飯はお前が作ってるし、洗濯とかは大家さんの加藤さんがやって、いつも家帰ってくるとたたんであって、後はタンスの中にしまっただけ終わるように玄関に置いてあるから苦労しない。家賃

も俺の親父が払ってるし、お小遣いもあるし、こまらない。うん…
…まあここが取り壊しになったら俺は死ぬな。うん」

改めて、和樹は自分のぐうたら差がわかった気がする。

「あんだ、なんで太らないの。そんな感じでゲームしてるだけで。

あ！ でも喧嘩とかしてたまに猛ダッシュでいえにかえってくるわよね」

そついわれればと、思う。

（でも、俺は不良じゃねえよな。ちゃんと勉強してるし）

実際は周りが揉め事をお越して、そいつらを守ったり、かばったりして飛び火して喧嘩になったりしているだけの不幸人である。

「勉強してるからって不良とはかぎらないよ。周囲から思われれば不良だって」

「あの…：勝手に人の心をテレパシーしないでください」

「エスパー綾とよびなさいな。ま、かんだけどね」

「かんで当てられても怖いのですが……」

といったところで和樹は朝の定番ランチを食べ終えた。

「さて、どうしようかねー」

和樹は立ち上がりながら背伸びをする。

「和月はどうすんのさ」

「うーん。私もすることないんだよね」

少し遅れて綾も食べ終わった。

「なら、桃鉄でもやんね」

「それはパス」

即答で返事を言われると少し、気分がへこむ。

（仕方ないか、家に戻ってもう一度魔術書を読むか）

と考えたところで、あることを思い出す。

黒漆ノ太刀をあつちに置きっぱなしだ。

和樹の父親が珍しく真剣味がある声でいつていたのだ。一応、大事にしたほうがいいはずだ。

皿をキッチンに戻すと、玄関にいそいで向かう。

また自転車で行こうとするが、この時間帯で目的地まで近いからといってさすがにパジャマのままはだめだろうと思った。

和樹は、ため息を付きながらめんどくさそうに階段を登って自分の部屋に戻る。

適当にクローゼットとタンスから服を選ぶとまたきたみちを戻り、自転車に乗ると、全速力でペダルをこいでいく。

三分弱でつくと入口の門が少しあいていた。

門は確かちゃんとしめたはずだ。

（誰かいんのか）

門をこえて行くと玄関の前にだれかたっていた。

女性だ。なぜか日曜日なのに制服をきている。

あれ、ときずくとそれは和樹の高校の制服をだった。

特徴的なのはその黒い髪だ。腰ぐらゐまであるかもしれない。

「あのー。なんかようですか」

棒立ちしたままだった少女がふりかえった。顔もとのっぺいかわい部類に入ると思う。ただその顔は無表情だ。

「宝具……返して」

枯れそうな声だったがその訴えは強い気持ちがかもっていた。

少しの間無言が続いていたが思い出したように和樹が口を開く。

「なんで——つつ！」

が、その行為は簡単に止められてしまった。

気づいたら和樹は門に体を叩きつけられて、沈み込んでいた。

「宝具……返して」

ゆっくりとすみこんでいる和樹に少女が近づいてくる。

和樹が見上げると、そこには無表情をこえて機械的な感じがする顔が視界に入る。

（なんだ。この子）

立ち上がると、一気に少女が接近してくる。更に拳を突き出そうとしていた。

「あぶねっ」

なんとか右によかれた。拳は空をきつた後、門に勢いよくぶつかるが少女の機械的な表情からはなにも読み取れない。

「モラルタ（憤怒）」

少女が小声でつぶやくと右手に剣が現れた。

（うそだろ）

魔術だ。咄嗟に和樹の頭の中に出てきた言葉がそれだった。

魔術なら、考えがいくつかある。だが、それを行動に移す前に少女が動き始めた。

少女は剣をおもいつきり剣を振り下ろしてくるが、体一つ分下がつて剣先はよかれた。

ずどん。という鈍い音がすると同時に庭の芝生は爆弾が爆発したように、おもいつきりへこんでいた。

「返して」

また、その言葉かと警戒しながらもあきれていた。

だが少女は和樹の答えも聞かずに剣を振り上げてくる。

「またか」

和樹は早めに距離をとって下がる。

剣の威力はすごかったが、剣を扱う少女自体の腕はそんなでもない。実際、剣筋は和樹の目でなんとか追っついていける。

少女が剣を振るってくる。

剣先に集中していれば平気だと和樹はつぶやく。

剣は少女の左横腹でとまっている。そのまま横一直線に剣先が動いていく。

それを大きく後ろに跳びと剣は空を切っていった。

（これでできるはずだ）

和樹はそこにしゃがみこむと、手のひらを芝生にあてる。

「パージ（浄化）」

和樹は地面下に埋まっている魔方陣に魔力をそそぐ。

1 - 2 (後書き)

P C 変えたからさくさく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2777y/>

召喚師のヒエラルキー

2012年1月13日23時00分発行